献辞

まずはじめに、神奈川大学経営学部17世紀文学研究会の発足から同研究会機関誌「麒麟」の刊行後、一貫して同誌編集業務を担当されてきた復本一郎先生に謝辞を述べさせていただきます。

定年を先取りしての退任の背景には様々な思いがあるのだと推察しますが、いずれにしても優れた教育者であり、わが国の俳句研究分野での第一人者を失う我々にとっては痛恨の極みであることは確かです。

思い出は尽きないのですが、何よりも怠惰かつ興味対象が広範でなんでもつまみ食いしたがる筆者にも、自由な執筆の機会を与えてきていただいてきたことに感謝しています。

どうかこれよりも実りのある人生を送られることを願ってやみません。お疲れ様でした。

*

チェ・ゲバラのイコンと政治プロパガンダ（研究ノート）

加藤　薫

筆者は2008年度より科研費基盤研究Ｂ「プロパガンダと芸術―『冷戦期・冷戦後』の＜芸術＞変容」（代表:長田謙一首都大学東京教授）の一研究分担者として同研究プロジェクトに参加している。ラテンアメリカにおいて「冷戦期・冷戦後」という政治的時間コンセプトに対応して、もっとも顕著に使われてきたものの一つがチェ・ゲバラの図像であるという前提からの研究仮説を築くことが今年度筆者に託された課題である。

そもそも「プロパガンダと芸術」という問題設定については主として第二次世界大戦前後のヨーロッパにおける美術現象の研究という通念がある。しかしながら当該研究プロジェクトの新しさは、空間的・時間的に拡大し、非欧米世界や２０世紀後半の美術現象にも適用するところにあり、この点は2008年６月１日開催の

第一回研究例会で確認の上、合意形成されている。

1.

1991年の旧ソ連邦崩壊に伴い、冷戦期の終焉が宣言され、時間差はあれど、いずれ国際社会がグローバルに、自由競争主義に基ずく資本主義国化してゆくような未来像がささやかれた。しかしながら20世紀末になるとラテンアメリカにおいてはこの流れに逆らうように、対外的には反米、国内的には社会主義的政策を掲げる左翼政権が次々と生まれ、2009年初頭現在でベネズエラ、ボリビア、ブラジル、アルゼンチン、チリ、グアテマラ、ニカラグア、コスタリカ、エクアドル、パラグアイ、ペルー、それにキューバと12カ国ある。

それぞれに社会党や共産党にルーツを持つ政権、ポピュリスト運動にルーツを持つ政権、社会運動や民族自立運動にルーツを持つ政権などに分類される。また急進左派とか穏健左派といった分類も可能であるが、こういった政治学的分析は筆者の専門外のことであるし、また筆者の研究課題にさしあたって直接関係するものでもない。上記のラテンアメリカ圏の国々の中では1961年から社会主義国化をめざしたキューバがもっとも左翼政権の歴史が長く、2009年１月１日にはキューバ革命50周年を迎えた。その意味で冷戦期から冷戦後を通じて一貫した政治体制にあるラテンアメリカ唯一の社会主義国である。そしてエルネスト・ゲバラ（エル・チェ）はキューバ革命運動から革命政権樹立後ボリビアで処刑される1967年、そしてそれ以後もキューバ国内のみならず上記左翼政権国においても彼の記号化された図像がカリスマ革命家のイコンとして掲げられる。

ボリビアでは首都ラパス市内にゲバラ・ショップがあり、出版物はじめＴシャツからバッジに至るノベルティ・グッズが売られている。エボ・モラレス政権になってからは、ゲバラが処刑されたバリェ・グランデはただの山村から一転して＜革命の聖地＞という意味が付与され、簡素ながらも観光客、外国人向けレストランや宿泊施設が作られ、ゲバラのイコン化を演出している。そもそもゲバラの処刑地がサンクチュアリとなりゲバラも聖人化される恐れがあるとして処刑に反対し、長期の刑務所収監を主張したのがＣＩＡだった。そしてその予測通りになったというのが実態である。

ニカラグアにおいても政権に復帰したオルテガ政権は国民的英雄であるサン

ディーノの肖像に並べて意図的にゲバラの肖像を多用している。書店や学生向け古書店にはゲバラ関連の書籍が目立つ場所に置かれるようになった。

社会主義国ではないがメキシコにおいても、メキシコ革命の英雄エミリアノ・サパタや1994年末にチアパス州で蜂起の声を上げたＥＺＬＮ（サパテイスタ解放戦線）のカリスマ的存在となったマルコス副司令官の図像と並んで、記号化されたゲバラのイコンが様々なメディアや商品に引用されている。

グアテマラにおいても首都グアテマラ市のみならず例えばチチカステナンゴのような山間部のマヤ人たちが多数を占めるような村でも民芸市場などでＴシャツなどのゲバラグッズが売られている。単に商品の流通の問題なのかも知れないが、外国人観光客などがあえて買うものとも思えず、改めてゲバラ人気を確認させられたようだ。

筆者はまだ訪問したことがないがアルゼンチンのロサリオ市にあるゲバラの生家周辺は整備され、史跡として一般公開されていることもインターネット情報や新聞記事などで確認している。

記号化されたゲバラ図像の伝播には、政権によって恣意的にマニピュレートされたプロパガンダのツールという側面がある。しかしながら現時点においては、キューバ以外のラテンアメリカ諸国においてゲバラの図像がいつから出現し、誰によって操作され、どの図像がイコン化され、誰に積極的に受け入れられているかなどを語るほどにはまだ十分な資料がない。ここではまずキューバに限定し、ここ五十年間の歴史や政治的背景からゲバラの図像が必要とされたり、プロパガンダのツールとして積極的に利用せざるを得なかったような局面を確認する作業を試みる。

2.

フイデル・カストロが初めて武装蜂起を主導したのは1953年７月26日のことで、サンチアゴ・デ・クーバ近郊にあったキューバ陸軍モンカダ兵舎を襲い、武器弾薬や他の装備を奪う計画を実行した。しかしこの時の襲撃は失敗に終わる。現在この兵舎は博物館になっており、また襲撃の日に135人の人民部隊が密かに集結したシボネイ農場も史跡になっている。どちらもキューバ革命の始まりを記念する聖地になっているわけだが、ゲバラはまだ登場しない。

逮捕されるも奇跡的に助命されたカストロは、弟のラウルなどとともにピニョス島（現在は「青年の島」に改名）の刑務所に収容された。そして恩赦をうけた直後の1955年７月にメキシコに亡命した。ピニョス島はキューバ革命後は世界中の社会主義国から男女青年が集い、施設で集団生活を送りながら社会主義教育を受け、農耕作業などに従事する場所となった。現在では規模は大幅に縮小されたが一応機能していることもあり、刑務所跡も含め、聖地化するには至っていない。いずれにせよ、ここでもまだゲバラは登場しない。

カストロは亡命先のメキシコで同志を増やすと共にゲリラ戦の訓練をおこなっていた。カストロとゲバラが初めて出会ったのはここメキシコであった。ゲバラは、グアテマラにおいて農地解放など社会主義的改革政策を推進していたハコボ・アルベンス大統領の元で活動していたが、米国ＣＩＡの資金を受けて隣国ホンジュラスで軍事訓練をおこなってきたカスティーリョ・アルマス大佐率いる反乱軍によって同政権が崩壊したため脱出してきたのだ。

意気投合したカストロとゲバラは同志となり、ゲバラは従軍医師という身分で1956年11月25日にベラクルス州トゥスパン港から同志八十有数名と共に漁船グランマ号に乗り込み、12月2日にキューバのオリエンテ州の海岸から上陸した。キューバ現代史の中では一般にこの12月2日がキューバ革命開始の日とされている。しかしこの時点でもまだゲバラは同志の一人という以上の存在ではなかった。

上陸したカストロ軍は戦闘で人数を減らしながらもサンチアゴ・デ・クーバ市からそれほど遠くないシエラ・マエストラという山岳地帯の奥に拠点を構築し、ゲリラ戦を展開する。この期間にゲバラの存在は大きなものになってゆき、現存する写真資料の数も増えてくる。蚊よけのために持病の喘息をかかえながらも葉巻をくゆらせ、肌を守るために髭をのばした肖像写真からゲバラのイコンの原型が形成された時期であろう。

1957年はまだ苦戦の連続だったが、1958年頃からバティスタ政府正規軍とも対等に闘えるようになり、首都ハバナ市に近いサンタ・クララ市の攻防ではゲバラ率いる部隊が活躍し、攻略に成功した。一般にこの成果がバティスタの敗北を決定付けたと言われている。同時にゲバラをキューバ革命の中枢に位置づける契機ともなった。

1959年1月1日未明にバティスタ大統領が亡命し、革命軍はハバナ市を解放した。

カストロは7月までには政権を固めた。ゲバラがキューバ産砂糖の売り込みで日本に訪問したのもこの7月だった。ゲバラは広島の原爆ドームを訪問した。この時の報道写真はあるが、日本政府は米国の意向を気にして商談を受け入れず、ミッションは不成功だったこともあって決定的なイコンにはならなかった。

1959年8月に米国の経済封鎖が開始され、カストロは対抗して米帝国主義と戦う姿勢を明確にする一方、ソ連、中国など社会主義国との国交を樹立し、ソ連からは多額の援助をとりつける。しかしキューバ国内の旧勢力が過激な反カストロ政権活動を続け、1960年3月にはキューバ輸入の武器を搭載したフランスの貨物船クーブル号がハバナ港で爆発した。死傷者300人を越える事件の背後にはＣＩＡが関与していたとされる。この事件の犠牲者の葬儀に参列したゲバラをキューバ人写真家アルベルト・コルダーが撮影した。キューバの勝利の星を着けたベレー帽を被り、やや上向きに右側の遠くを見つめる長髪のゲバラの肖像写真は以後、それこそ何百万回もコピーされる図像となった。

1961年1月に米国のアイゼンハゥアー大統領はキューバと外交関係を断絶し、ケネディ政権もこの路線を引き継ぐ。1962年初頭には米国主導の米州諸国機構がキューバ追放を決議し、米国は禁輸措置を正当化する。ケネディ大統領がこの禁輸政策署名の前夜に秘書を使ってキューバ製の葉巻プルマンを千本以上買占めたのは有名な話しである。カストロはラテンアメリカ諸国に反米・反帝国主義を呼びかける「第二次ハバナ宣言」を発表すると同時にソ連とはキューバ国内に戦略ミサイル基地の建設を秘密に許可する。

1962年10月にキューバ国内でのソ連のミサイル基地建設の事実が発覚し、核戦争の危機が認識された。ケネディはトルコにおける核爆弾配備の中止とキューバへの軍事侵攻停止を交換条件に、ソ連にキューバでのミサイル基地建設の中止と撤退の約束をとりつけた。

この米国の軍事侵攻を阻止する冷戦構造があったからこそ、キューバ革命体制は生き延びることが出来たのだが、カストロは自分の頭越しに大国同士で事態収拾が図られたことに反発し、この時より、反米帝国主義では一致するものの、ソ連とは異なる独自の国際的革命路線のネットワークを第三世界に構築する対外政策に精力を注いだ。この時期よりゲバラの新たな政治的役割というものがはっきりしてくる。

カストロはすでに1962年から教育の無料化や農地改革など社会主義的政策を強化していたが、米国のキューバ敵対政策も強化されていった。政治的にはソ連とも対立する独自の革命路線を続けたいのだが、経済的には米国主導の国際的禁輸措置と集団的国交断絶によって破綻寸前まで追い込まれ、主生産物である砂糖でさえ国内消費分は配給制にする一方、輸出による唯一の外貨獲得可能な砂糖の大増産を試みる。最大の輸出国はソ連であった。

こういった政治と経済の微妙なバランスをとりながらの政局運営を余儀なくされている状況の中で、活動を政治分野に特化していったゲバラは、1965年２月にアルジェリアで開催されたアジア・アフリカ人民連帯機構経済会議において、第三世界への最大の援助国であったソ連の大国主義批判を行い、当時のブレジネフ政権を怒らせた。国民のために経済支援をとるか、盟友のゲバラをとるか、という選択をソ連から迫られたカストロは最終的にゲバラを斬ると決断した。

同年4月にゲバラはキューバ国籍を返上した上、内線にあけくれるアフリカのコンゴで革命左派の支援活動を展開するため出国した。コンゴでの日記、それに出国前にカストロ個人に宛てた私信「別れの手紙」などが当時の状況を語る基本資料だが、このうち日本語でも再三翻訳が出版されている「別れの手紙」がゲバラ・イメージのイコン化の第一歩として大きな役割を果たした。

コルダーの撮影した一枚の写真とともに書き添えられる　Hasta la Victoria Siempre　の四語は、ポスターや壁画、旗などにそれこそ世界中で数千万回以上もコピーされてきた有名な革命の標語で日本語に訳せば「勝利するまで　永遠に」とか「常に勝利するまで」ということになる。

カストロは10月3日に開催されたキューバ共産党創立記念式典でこのゲバラの手紙を読み上げた、「別れの手紙」の原文では、この文章のすぐ後ろにコンマでつづけて「祖国か死か。」という文言が続いていた。つまり、いつかはキューバに戻るという意思を持っていたと解読できるのだが、伊高浩昭は少なくとも口頭の演説ではこの後半をあえて読まずに、＜キューバのゲバラ＞から、＜世界に普遍的なゲバラ＞というイメージ操作を行ったとしている。(注1)　伊高は改竄の事実があったことを前提に、ソ連に対してゲバラと縁を斬ったことをアピールしたのだと、踏み込んだ解説をしている。(注2)　伊高説の通りなら、それがゲバラ自身が望んだものでないにもかかわらず、死ぬまではキューバに戻れなくなった。こ

の時から＜キューバ革命の＞一革命家から独立して、より上位の〈世界の＞革命家の道を歩むことになったとも言える。もちろん、ゲバラのような革命家を必要とする人の前にはいつでもどこでも現れる＜イメージ＞としてのゲバラ作りの第一歩でもあった。(注3)

3.

ゲバラは結局コンゴではうまくゆかず、極秘のうちにキューバに一度戻る。そして再度準備を整えてから同志と共に1966年11月にボリビア入りした。そしてサンタクルス市から南西に約250kmはなれたナンカウアス農場に拠点を築いた後、オルグ活動に入る。

しかしボリビア共産党はソ連への遠慮から支援を拒否した。背景には外国人に主導権をとられたくないという革命運動の主導権争いもあったと見られる。孤立無援の状況に陥ったゲバラは、1967年10月8日に米国ＣＩＡの対ゲリラ訓練を受けたガリ・プラド指揮下の陸軍部隊に逮捕され、ラ・イグエラ村の小学校校舎に監禁された翌日の10月9日に銃殺された。捕虜の処刑は国際法上許されることではなかったので、ゲバラは戦闘中に死亡したと公表された。

死体はすぐバリェグランデという別の村に空輸され、一晩セニョール・デ・マルタ病院の洗濯部屋に置かれた後にバリェグランデの空港滑走路と共同墓地の間に埋められた。この日に病院を訪れた地元の一女性は、イエス・キリストとも見間違うような容貌の遺体だったことなどを証言している。遺骨は1997年に発掘された後、キューバに空輸され、10月17日にサンタ・クララ市の廟に再度埋葬された。ゲバラはイエス・キリストと比せられるような聖人だったとのイメージが30年後にも継承されたのだ。ゲバラのバリェグランデ埋葬地跡は現在屋根のある建造物で保護されている。

あまりにもリアルなゲバラの死体写真（撮影前に洗浄され、ホルマリンが注入された）や、成果を誇るボリビア軍将校たちの写真は世界に報道された。それを見たキューバ国民は、キューバ革命の英雄であったゲバラに支援の手を差し伸べなかった冷酷なカストロを非難する。それが冷戦期における国際政治の宿命であったにもかかわらずである。非難をかわす目的もあって、カストロは1968年初頭にあまりにもソ連寄りで内通しているとの理由からアンニバル・エスカランテ

を反逆罪で逮捕し、ソ連の下僕でないことをアピールした。一方、1968年8月にソ連がチェコスロバキアを侵攻するとカストロはいち早くソ連支持を表明し、ブレジネフ政権を喜ばせるなどしたたかな面も見せた。

しかし、カストロが本来の革命家ならば社会正義を標榜する自身のモラルからも当然弱小な国の代弁者として動くべきではないかと考えるキューバ国民は、亡くなったゲバラの復活を夢みるようになったように思える。キューバ革命体制が実態としてソ連に追従しなければ存在できないという現実から目をそらすためには、ゲバラのような純粋な存在は必要だとの認識から、政権側もまた象徴化されたゲバラをプロパガンダに利用する路線に乗り換えた。キューバ政府は1968年にゲバラの逮捕された10月8日を＜ゲリラの日＞とし、記念切手を発行した。切手のデザインにはキューバ、ボリビアの地図と前述のコルダー撮影写真を組み合わせ、チェの署名も入れている。

1960年代後半は欧米におけるベトナム反戦運動やパリの五月革命の勃発などなど、時代は世界中で学生運動やマイノリティーの抵抗運動が勃発した時期であり、この時勢にのってキューバ革命の革新性を再度アピールし、反体制活動を求める魂の源泉としてゲバラのイメージを流通させる戦略があったとも思われる。この点についてはより深い考察が求められるが、1960年代後半に制作され、国際的に流通したポスターなどグラフイック作品類をチェックする限り、ゲバラ図像が多用されているのは事実である。キューバはベトナム戦争では北ベトナムを支援し、軍事顧問団が活動しただけでなく、反米ポスター制作やホーチミンのイコン化などビジュアル面でも手を貸した。

1970年代になると世界各地、とりわけ先進諸国の抵抗運動の中で消費し尽くされ飽きられた感のあるイメージになったが、もしゲバラが生きていれば歓喜するような現象が多発する。ペルーでは反米政策をとるベラスコ・アルバラード大統領率いる軍部革命政権が登場した。パナマでは米国に運河の返還を求める民族主義的闘争が始まった。チリではアジェンダ人民連合政権が登場し、社会主義の道を歩む。ニカラグアではキューバが支援したサンディニスタ民族解放戦線がＣＩＡ支援の国軍に対して優位にたった。アフリカのアンゴラでは1975年以来、新しく生まれた社会主義政権がキューバに支援を求めてきた。この要請を受けて1990年までに延べ35万人以上のキューバ正規兵を送った。アフリカではこの他にエチ

オピア、ナンビアでも活動した。アフリカの政情を反映させた国際仕様のポスター、即ちスペイン語、ポルトガル語、アラビア語、英語などでメッセージの書かれた多色刷ポスターも広く配布した。ゲバラ・イメージをシルエットであらわしたような記号化もこの頃に進んだように見えるが、本格的な復活は1980年代のことだ。

一方1979年にはまた1968年と同じような状況が生まれる。12月にソ連軍がアフガニスタン領内に侵攻した。この年9月にはアフガニスタンも加盟国である非同盟諸国会議の議長に選ばれたカストロだが、結局はその立場にもかかわらずソ連支持を表明するしかなかった。1970年代に「ソ連の傀儡」であると宣伝する米国の広報戦略を否定してきたカストロにとっては苦渋の決断だった。

4.

1980年5月にマリエリートス事件が発生する。そして9月までの5ヶ月間にキューバのマリエル港から十二万人を越えるキューバ人が経済難民として海から米国フロリダ州に去っていった。すでにマイアミにはキューバ革命直後から亡命者が集まっており、マリエリートスたちに先立って1965年にもカマリオカ港から大量の難民が亡命していた。20世紀末にはすでに第四、第五世代が生まれており、統計の取り方にもよるがキューバ系米国人は最大で約120万程度いるといわれる。だからマイアミはいわば<第二のキューバ>とも言えるのだが、ここでゲバラのイコンがどのように受け止められ、使われている（あるいは忌避されている）のかは興味ある課題である。キューバ革命直後から亡命を余儀なくされた第一世代にとってゲバラはカストロと同列の否定されるべき人物像であろう。しかしマリエリートス以降のキューバ難民たちにとっては、カストロの犠牲者という意味ではゲバラもまた同類なのだ。実際にマイアミのキューバ人街を歩き、書店や民芸店など訪れてみると、結構ゲバラ関連の商品が並べてある。ただそれらを誰が購入するのかという点や、どのような文脈で流通しているのかまではまだ未調査である。

マリエリートス事件の発生した1980年の米国はカーター政権時代でキューバとの関係改善を望んでいた。しかし1981年からレーガン政権になると、英国連邦に属しながらもキューバの強い影響下にあったグレナダに侵攻するという強い反共

政策を示した。より強力な後ろ盾を必要とするキューバにとってソ連だけが頼みの綱だったが、ソ連の政治体制は内部から崩壊し始めていた。1985年には鳩派のゴルバチョフ政権が生まれ、＜ペレストロイカ＞など改革路線を進める。1989年11月にはベルリンの壁が壊され、12月には地中海のマルタ島で米ソ首脳が会し、東西冷戦の終結を宣言した。経済分野でのコメコン体制も政治分野でのワルシャワ条約機構も無用なものとなった。1990年３月には市場経済への移行プログラムと連邦制再編の計画が発表され、そして1991年12月にはついにソ連そのものが消滅し、新たにＣＩＳ（独立国家共同体）が発足した。この1991年12月は、キューバが初めて五百年に及ぶ欧米大国の支配から自由になった記念すべき転換の時期であった。しかしまたその自由とは等身大の能力の能力で自力更生しなければならなくなったことも意味した。

案の上、キューバは困窮した。国民の不満は高まり、革命体制を死守ために1993年には禁断の秘策である米ドルを始めとする外貨の流通を自由化した。しかし予想どおり外貨自由化はドルをもつ者ともてない者の間の生活格差を生んだ。様々な不満が1994年にはピークに達したがカストロはのりきった。1998年１月にローマ法王ヨハネパウロ２世が五日間の日程でキューバを訪問し、ゲバラと縁の深いサンタクララ市で最初の野外ミサを実施した。ここではローマ法王の訪問の意味についてゲバラ・イコンと関連づけての深い分析が必要だということだけ指摘しておこう。

さて、冷戦終結後の時期にゲバラのイコンはどのような意味をもっていたかを検討するのが次の課題だが、すでに幾つか想定される答えがある。①外貨獲得のために力をいれている観光業のためにも、「永遠に革命の情熱とフレッシュさを失わない若い国」というロマンテイックなイメージを演出するための記号として積極利用するイメージ戦略、②どのような困難にあろうとも革命体制は維持し、カストロ退陣後もその方針は変わらないという国家意思の象徴として発信し続ける、③キューバ以外に新しく生まれた左派政権の統合の記号としてキューバ以外の国で積極的に使われることを容認し、新たな意味さえ付け加えながら流通を促進する、などである。

2003年3月にカストロが広島を訪れ、40年以上も前に同地を訪れたゲバラの写真を眺めていたそうだが、今だゲバラを必要とするのがキューバの、そして世界

の現状だ。付け加えれば、ゲバラのカリスマ性を家族にまで求める傾向もある。2008年5月にゲバラの娘で医師であるアレイダ女史が初来日した。彼女は日本だけでなく世界中を飛び回っているそうだ。いずれにせよ、冷戦後におけるゲバラ・イコンの使われ方の検証はまだこれからである。

＜脚注＞

注１．伊高浩昭、「冷徹な、ときには冷酷な現実主義者　フィデル・カストロ小伝」、雑誌『現代思想』、vol. 36-6、2008年5月、pp. 15-26. ちなみに文中のカンマはケバラが誤ってペンのインクをつけてしまったもので本来は文末まで一文続きだったとの説もある。

注２．同上. pp. 26-27.

注３．戸井十月は「国際主義者」という言葉を著書の中で適用している。「ゲバラ最後の時」、集英社、2009年。